

サポクラ 通信

令和3年(2021年)8月号

今月の内容は...

- ・エゾユキウサギあれこれ1
- ・ゾウの食べ残し5
- ・展示場に樹木を移植しました7
- ・世界最高齢のダイアナモンキー11

エゾユキウサギあれこれ

円山動物園サポートクラブのみなさんこんにちは！そしてはじめまして！
今年度から1班に配属されました飯島と申します。
私の担当は、エゾユキウサギ、ニワトリ、コールドック、ガチョウです。

☀️今年の夏はとっても暑かったですね…☀️
エゾユキウサギも暑さでだら〜んとしていることが多かったです。



今回はそんなくエゾユキウサギ>について皆さんにお伝えしたいと思います。

《基本情報》

- 和名：エゾユキウサギ
- 英名：Mountain Hare（山のノウサギという意味）
- 学名： *Lepus timidus ainu*

学名の意味は、「アイヌ(ainu)の臆病な(timidus)ウサギ(Lepus)」

- 生息地：北海道全域 特に好んでいるのは低山や、伐採地後の草原
- ※ユキウサギの仲間はイギリスからユーラシア大陸まで広く分布しています

- 特徴

その①：とにかく” 臆病 ” !!

学名のラテン語「timidus」にもあるように、非常に臆病です。
飼育作業をしに展示場に入るだけでウサギたちは逃げていきます…

その②：夏と冬で色が変わる？！

年に2回、換毛といって毛が生え変わります。夏毛は草原の緑に溶け込むように茶色に、冬毛は深い雪の中でも見つからない真っ白に生え変わります。

その③：日本で最大のウサギ！！

日本にはエゾユキウサギのほかに、エゾナキウサギとニホンノウサギ、そしてアマミノクロウサギの4種が生息しています。その中で一番体が大きいのがエゾユキウサギです！なんといっても特徴は早く走るためのながーい足と、雪の上を素早く走るための大きな足！伸びをしている姿は一見の価値ありです！

・すきなもの

野草(ヨモギ、クズ、スギナ、クローバー)、ヤナギ、イタヤカエデ、などなど…野生では多種多様な植物を食べているので、動物園でも春から秋にかけてはなるべく多く野草をあげるようにしています。

・最近のニュース

2021年7月1日と7月2日、エゾユキウサギに子供が7頭誕生しました！



↑生後0日目の姿です。毛はふわふわ、大きさは大人の握りこぶしくらいです。エゾユキウサギは、母親のみが子育てに参加するのですが、さほど熱心ではありません。授乳のタイミングは1日1～2回ほどで、それ以外の時間、こどもは隠れています。授乳回数が少ない分、母親の母乳は栄養いっぱいです。そして、こども達も生後1週間ほどで大人と同じように草を食べ始めます。



↑生後20日と生後30日の姿

生後20日には大人よりもふた回りほど小さいくらいでしょうか？体は小さいですが、走るスピードは親にも負けません！

生後30日目に、葛(くず)の葉を給餌してみました。大人よりも先に駆け寄ってきて、さっそくむしゃむしゃ食べていました。次の日には跡形もなくなっていました！食欲旺盛なのは良いことです！

もう少し体が大きくなったら、子供たちをオスとメスに分けます。もちろん、しっかり自分たちでご飯を食べられるので安心してください！

以上！エゾユキウサギの基本情報&ニュースでした！

《アイヌの人々とエゾユキウサギ》

エゾユキウサギは、古くからアイヌの人々の貴重な資源として役立っていました。

例えば、エゾユキウサギのお肉は貴重なたんぱく源になります。そして毛皮は暖かく、北海道の厳しい冬を乗り切るために重宝されました。

エゾユキウサギはアイヌの言葉で〈イセポ〉と呼ばれています。意味は、〈イーッと鳴くもの〉だそうです。私はまだ鳴き声を聞いたことがないので、本当に「イーッ」と鳴くかはわかりません…そんなエゾユキウサギには、いろいろな昔ばなしがあります。今回はそのうちの1つを紹介したいと思います。



おかしおかし、シカはウサギのような足を持っていました。

シカは雪の上をどんどん進めるので、なかなか人間はとることができませんでした。それを気の毒に思ったウサギが、シカを騙して自分の足とシカの足を取り換えました。

シカは、騙されたと知って火のついた枝をウサギに向かって投げました。

それがウサギの耳の先にあたって、今でも黒く残っています。

ウサギの毛の色が変わるのは、雪の上をどこでも走れる足を手に入れて、うれしくて着物をひっくり返しに着たからなのです。

公益財団法人 アイヌ民族文化財団ホームページ掲載

絵本「くまのしっぽが短くなったわけ」作者黒瀬久子さんの解説より引用、一部改編



※文中のウサギはエゾユキウサギ、文中のシカはエゾシカのことで

冬、真っ白に毛が生え変わるエゾユキウサギですが、耳の先だけはこのお話の通りずっと黒いままで。

実は、野生のエゾユキウサギの生息数は年々減少しています。

昔はたくさん生息していましたが、駆除や、キツネによる捕食、また生息地の破壊により少しずつ頭数が減っているようです。

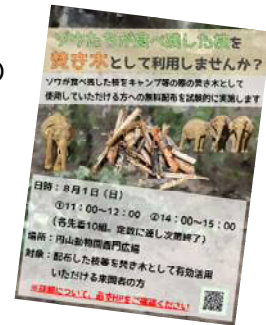
エゾユキウサギがこれからもずっと北海道で暮らしていけるように、たくさんの人に生態や、現状を知ってもらいたいと思います。

なかなか野生のエゾユキウサギを観察することは難しいので、ぜひ円山動物園にエゾユキウサギを見に来てください！



ゾウの食べ残し

サポートクラブのみなさまこんにちは！アジアゾウ、ニホンザル担当の野村です。今回は、8月1日に実施した「ゾウの食べ残した枝の配布試験事業」についてご紹介します。



— 驚愕の事実 —

円山動物園では、エサの質や動物福祉の向上のために、市内の公園や森で剪定、伐採された枝を提供してもらい、ゾウたちに与えています。しかし、ゾウたちは与えたものを100%きれいに食べてくれるわけではなく、与えたうちの2～3割は食べ残しとなります。



このゾウたちが食べ残した枝、昨年度までは廃棄処分となっていました。年度末に振り返ってみると、廃棄処分となった枝は1年間ではかなりの量となり、処分するために想像以上にお金がかかってしまっていることがわかりました…

— ゾウ舎は宝の山！？ —

「いくら動物福祉の向上のためとはいえ、こんなに廃棄処分してしまっているのか……」

「これだけのお金があれば…もっとゾウたちの枝を購入できるのに…！！」

そう思い、なんとか有効活用することができないか検討してい

たところ、当園職員のキャンパーや薪ストーブユーザーの話

から、薪や焚き木としての利用可能性があることがわか

ってきたのです。調べてみると、キャンプに使用するよう

な小さめの枝は段ボール1つで数百円ほど、薪ストーブに

使用するような太い枝は1㎡あたり1万円以上で販売されて

いることがわかりました。これまでその価値を知らなかった私た

ちですが、枝は十分に利用価値のある大切な資源だったのです。とはいえ、ゾウたちの食べ残

し。ボキボキに折られているうえ、ゾウの唾液や糞尿、砂などの汚れが付着している可能性が

あります。実際に使用した職員からの評判は上々でしたが、一般の方にとって需要があるのか

は悩ましいところでした。



—まずはお試し！—

やってみなければわからない！ということで、8月1日にお試し事業を実施することになりました。本当に需要があるのかな…誰も来てくれなかったら悲しいな…



と思っていましたが、多くの来園者の方々が興味を持って足をとめてくださり、アンケート結果からも十分に需要があることがわかりました。（ご参加いただいたみなさま、ありがとうございました！）



—食べ残しのこれから—

今回配布することができた枝は、ゾウたちの食べ残し約1か月分にも満たない量です。これからもゾウたちが円山動物園で暮らしていくかぎり、どんどん食べ残しの枝は出てまいります。これをゴミにしてしまうのではなく、みなさまのもとで継続的に有効活用していただきたいと考えています。今回のお試し事業をふまえて、今後も継続していく価値のある事業であるということを知ることができました。まだまだ検討しなければならぬ課題は多くありますが、その際には HP や Twitter で告知しますので、ぜひご参加ください！



ちなみに…ゾウ舎やサル山周辺には、ゾウたちの食べ残した枝を再利用した柵があります。よく見ると、ゾウたちがきれいに樹皮をはがしているのがわかります。来園された際には、ぜひ注目してみてください♪



展示場に樹木を移植しました。

サポクラ会員のみなさま、こんにちは。グラントシマウマとエランド担当の飯田です。すでにご覧になった方もいらっしゃるかと思いますが、この度グラントシマウマとエランドの屋外展示場に樹木を移植しましたので、そちらの様子をご紹介します。



樹木移植前のエランド屋外展示場(上)、グラントシマウマ屋外展示場(下)

グラントシマウマとエランドの展示場はとても日当たりが良く、夏季の暑さは動物たちにとって厳しいものでした。

そこで、展示場内に日影を提供するべく、庇の増設や日よけのシートの設置を検討しておりましたが、とても神経質なシマウマにとって人工物の設置は難しく、樹木の移植が望ましいと判断しました。また、以前にもイヌエンジュという木をシマウマの展示場内に植樹しましたが、シマウマは特に驚くこともなく、すぐに慣れてくれました。

↓類人猿館に生えていたヤマグワ

新たに植える枝ぶりの良い樹木を園内で探していたところ、類人猿館の解体に伴い行き場をなくしていた2本の木に出会いました。とても立派なヤマグワとミズナラの木でした。担当者は、これが展示場内にあれば、とても効果的な日陰ができる！と思いました。



↑類人猿館に生えていたミズナラ

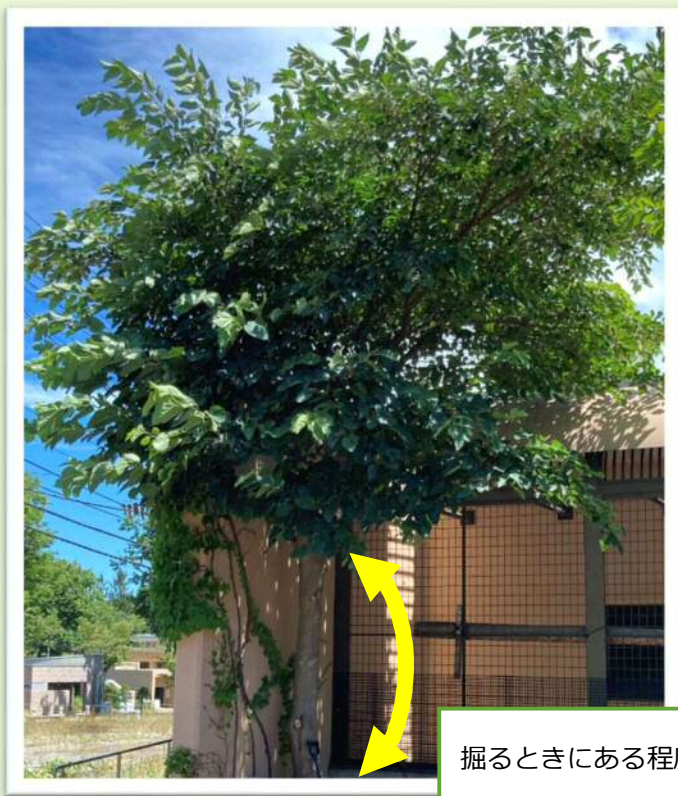
その後、無事にこの2本の木の移植が決まりましたが、一点気がかりなことがありました。

それは、移植の実施時期についてです。一般的に移植の適期は春もしくは秋とされていますが、類人猿館の解体スケジュールとの兼ね合いもあり、秋まで待つことができない状況でした。夏は葉が茂って水をたくさん吸う時期であり、移植適期と解体工事のタイミングが見事に合わなかったのです。

しかし、放っておいてもただ切り倒されてしまうので、ダメもとで移植することになりました。もし枯れてしまったら、時期を改めて再度木を植えようと考えています。



根の掘り取り～移植まで



掘るときにある程度は根を切らなければいけないので、併せて低いところの枝葉も少し間引きます。

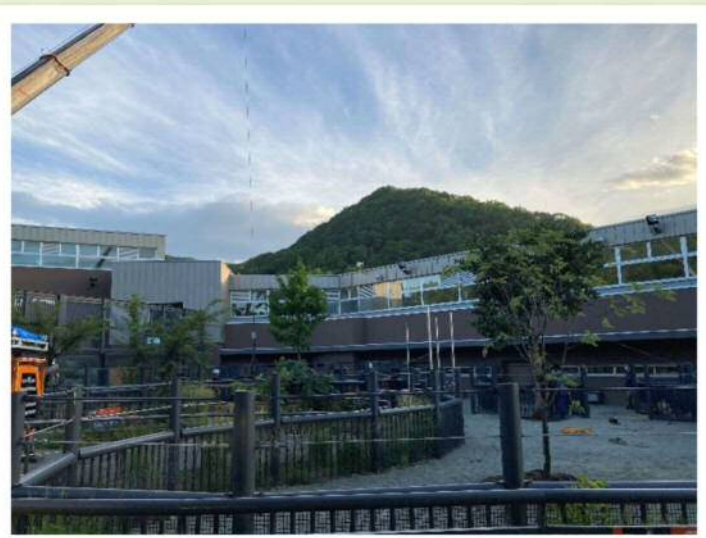


どちらの木も大きく、大型の重機を使って作業します。



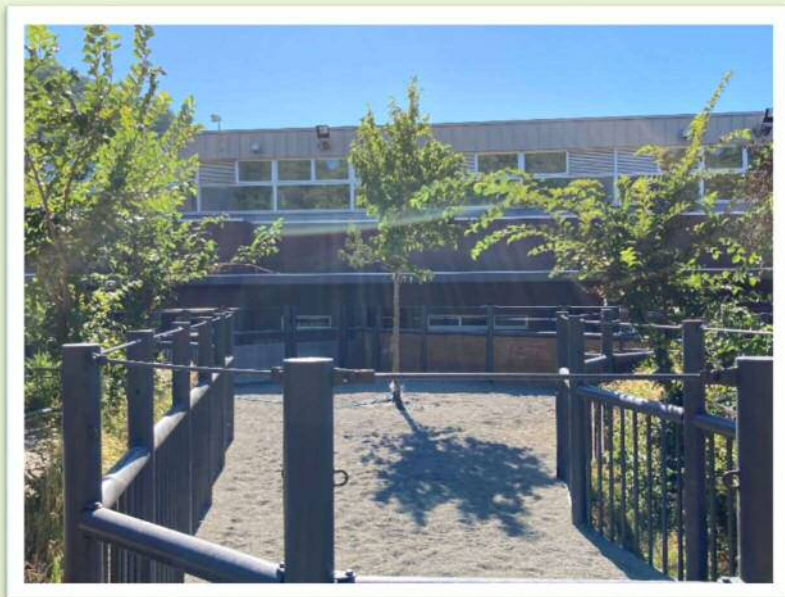
これらの作業を経て、展示場内まで木を運び入れることができました。

そして、日差しの向きや動物たちの動線を確認しながら、移植する位置を決めていきます。しかし、地盤が固すぎたのか小型重機をもってしても地面を掘ることができず、暑いなか業者の方には手作業で掘っていただきました。またこの日は風もあり、木がクレーンでつるされている間にあおられてしまい、業者の方と当園職員で木を抑えながら一丸となって作業を進めていきました。その後も、一度立てたヤマグワが倒れてしまうという予期せぬトラブルもありながら、無事にヤマグワ、ミズナラともに移植作業が終了しました。

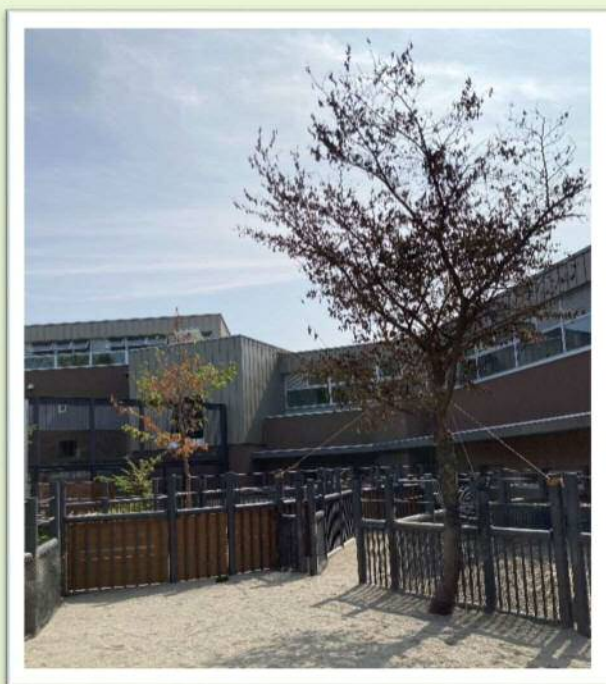




現在の展示場の様子



移植後のエランド屋外展示場(上)、グラントシマウマ屋外展示場(下)



木を植えたことで、エランド、グラントシマウマともに展示場内に日陰をつくることができました。今年の夏はもう終わりを迎えますが、なんとか無事に根付いて、来年以降も日陰を提供してくれることを願っています。

なお、植えてから2日間ほど警戒していたシマウマですが、何度か木の日陰の中に留まる様子を確認することができました。涼しかったのか、木に興味を湧いて近づいたのか、いずれにせよ少しほっとして、うれしく感じました。

8月現在、ヤマグワとミズナラどちらも葉がしおれています。このまま全ての葉が落ちていくものと思いますが、幹は生きているので、来季に新芽が出てくることを祈りながら、水やりを続けていこうと思います。



世界最高齢のダイアナモンキー

サポートクラブの皆さま、いつもご支援ありがとうございます。

エゾヒグマ館とモンキーハウス担当の小林です。

今回は、モンキーハウスにいる世界最高齢のダイアナモンキー「ワシントン」についてお話したいと思います。

ワシントン(♂)は1982年に
アメリカのタルサ動物園で誕生し、

1984年に来園しました。

今も同居している「はかた(♀)」との間には、
これまでに9頭の子どもが誕生しています。



はかた(左)とワシントン(右)

飼育下での寿命は30年から35年といわれていますが、ワシントンは現在39歳。

ワシントンの状態に合わせて、飼育環境も少しずつ変えています。

①階段とスロープの設置

4月下旬には、移動に時間がかかるようになってきたり、手探りでつかむ場所を探したりと、筋力や視力の低下が目立つようになってきました。そこで、まだまだ動いているうちにより安全な移動経路を覚えてもらおうと考え、階段とスロープを設置しました。また、滑る危険性が少しでも低くなるように、木組みの丸太の一部を幅のある板に変更しました。

最初は設置したものを徹底的によけて今まで通り金網をつかんで移動していましたが、そのうち使ってくれるようになりました。はかたも特に階段がお気に入りのようで、よく座って休息している姿が見られました。



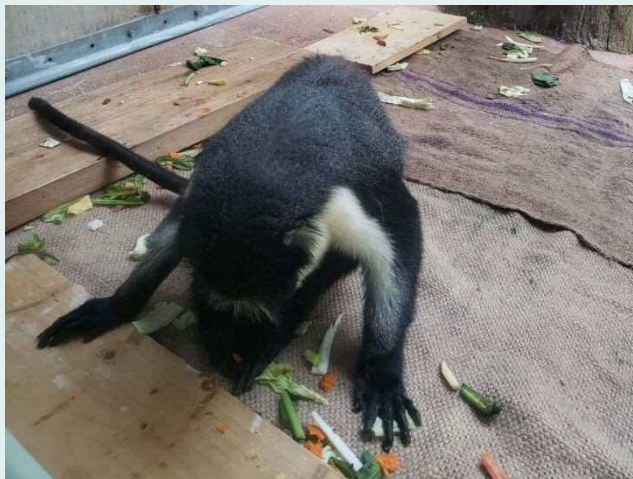
階段やスロープを使っているワシントン

階段で休息するはかた



②床ずれ対策

だんだんとスロープや階段でも移動が難しくなり、6月上旬には木組みに上がらず床で1日を過ごすようになりました。そうすると座っている時間も増えるため、お尻や後肢に軽度の床ずれがみられるようになってきました。床ずれ予防として、最初にピールチップを敷いてみたのですが、目がほとんど見えておらず食料を手探りで探す状態のワシントンにとっては、触れるチップがすべて食料に感じたのか、チップに触れる度につかんで食べようとしたため失敗。麻袋を敷いてみたところ抵抗なく使ってくれ、できていた床ずれも改善されました。今では、さらにクッション性の高い人工芝を床に敷いて、床ずれ対策をしています。



他にも…



ワシントンの生きる強さには感服させられるばかりです。
これからもワシントンの状態に合わせた、より過ごしやすい環境を整えていきたいと考えています。